台大日本語文研究第 26 期
2013 年 12 月、頁 183-216
2013-09-30 收稿、2013-11-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.183

朱舜水思想對日本文化之影響
—以孔子形象的傳播為探討中心—

徐興慶*

摘要

朱舜水在日本江戶及水戶講學十七年(1665-1682),其中建立「大學制度」是給德川光圀四個治理政治的要諦之一。本文除論述朱舜水所提「大學制度」及「聖堂」建設之外,從文化傳播的角度切入,針對(一) 教養與仁政;(二) 孝友誠信,顧行謹言;(三) 近裏著己;(四)敏慎與實踐;(五) 敬身爲大;(六) 釋奠習儀等學問的傳播,以及朱舜水的「孔子贊」與「聖像贊」、《學宮圖說》與「學校議」的文化移植內涵,聚焦探討朱舜水的孔子形象及其對德川社會文化層面的影響。

關鍵詞:朱舜水、大學制度、「孔子贊」、《學宮圖說》、「學校議」

* 國立台灣大學日本語文學系教授

The Influence of Chu Shun-shui on Japanese Culturel: A Discussion on the Spread of the Image of Confucius

Shyu, Shing-ching*

Abstract

Chu Shun-shui had been lecturing in Edo and Mito, Japan for 17 years(1666-1682). One of the four key principles which he suggested to Tokugawa Mitsukuni for governing is to establish "the educational system of the great learning."

Chu Shun-shui considers the construction of "Seidō (Confucian temple)"the most significant element of the educational system of the great learning. Stressing on the perspective of interexchange of thoughts, this article will analysis the spread of the teachings such as: a) gentry and benevolent government; b) to honor filial piety and friendship, to be honest, to be discreet in speech and action; c) to acquire the true essence of the studies by heart, d) to be earnest in what he is doing, and careful in his speech, e) to have self-respect, and f) the rite and ceremony of worshiping Confucius; moreover, the context of cross-cultural transplant in Chu Shun-shui's "Zan[Eulogy] of Confucius," "Zan of the Sacred Statue," Xuegon[Confucian temple] Tushuo, and "On School," in order to give a further discourse on Chu's image of Confucius and its impact on the culture and society of the Tokukawa Era.

Keywords: Chu Shun-shui, educational system of the great learning, "Zan [Eulogy] of Confucius," Xuegon[Confucian temple] Tushuo, "On School"

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

朱舜水思想の日本文化に対する影響
—孔子の形象の伝播を中心に—

徐興慶*

要旨

朱舜水は江戸と水戸において十七年間（1665-1682）講学した際、治理政治の一つの要諦として「大学制度の設置」を徳川光圀に提示している。本稿は朱舜水が構想する「大学制度」及び「聖堂」の建設のほか、文化伝播の視野から、(一) 教養と仁政、(二) 孝友誠信、行を顧みて言を謹しむ、(三) 近裏、己に著く、(四) 敏慎と実践、(五) 身を敬しむを大と為す、(六) 釈奠の習儀などの学問の伝播、及朱舜水の「孔子賛」と「聖像賛」、『學宮圖說』と「學校議」の文化の移植の二つに焦点を合わせて、朱舜水における孔子の形象とその徳川社会に対する影響について論じるものである。

キーワード：朱舜水、大学制度、「孔子賛」、『學宮圖說』、「學校議」

* 台湾大学日本語学科教授

朱舜水思想の日本文化に対する影響
—孔子の形象の伝播を中心に—

徐興慶

一、はじめに

朱舜水は日本で儒学を伝えたが、最もその意を得た門下生は長崎居留時代（1659-1665）の柳川藩藩儒安東省菴（1622-1701）であろう。朱舜水は省菴に次のように述べたことがある。「儒者は他の道有るに非ざるなり。即ち文・武・周公・孔子の道、即ち堯・舜の道なり。為さざれば則ち已み、一旦奮発すれば之を為す。之を挙ぐれば必ず其の効有りて、之を行へば必ず其の功を著す」[1]。また、次のようにも述べている。「儒者の道に、他の奇異以て人を動かすべきこと有る無し。惟だ是れ君義臣忠・父慈子孝・夫和婦順・兄愛弟敬・朋友信誠、祇だ布帛菽粟の如きのみ。故に君大夫は宜しく之を教ふる所以を詳らかにすべきなり。一家の夫婦兄弟の道伝へ出でて、君に事へ友を求めて其の道を尽さざる無し。推して一郷、推して一国、遊手の民無く、四野 貨を闢き、財 倉廩に聚まり、実に民 安んじ物阜く、国 富みて兵 自ら強し。戸ごとに詩書絃誦の楽しみ有り、人、上に親しみて敵愾するの心を懐けば、其の国に倡せざる者有らんや。推して天下に至らば、天下に平らかならざる者有らんや。」[2]朱舜水は日本において学問による治国という理念を宣揚したが、そこには多くの孔子の学説や形象が隠されている。

1664年の冬、朱舜水が越南（ベトナム）と長崎を往復していた頃[3]、徳川光圀（1628-1701）は儒者小宅生順（1638-1674）を長崎まで派遣し、この高齢の碩学を訪問させている。二人の間では長時間に及

---

1 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』（台北：台大出版中心、2004年）、193頁。
2 同上。
3 徐興慶「王直、鄭成功と朱舜水」、若木太一編『長崎東西文化交流史の舞台—明・清時代の長崎支配の構図と文化の諸相—』（東京：勉誠出版、2013年）、22-23頁。

ぶ対談がもたれ、『西遊手録』という貴重な抄本史料を世に残すこととなった[4]。朱舜水は「答小宅生順問」の中で、日本に居留している自分には一つの宿願があり、それは聖人の学を広めることである、と告げている。朱舜水は云う、

> 孔子は七十二君を歴聘し、一日王道の行はるるを求むるも得べからず。僕の荒陋を以て其の志を行ふを得たるは、豈に人生の大願に非ざらんや。誠に恐れながら貴国は邪教に惑ひて、未だ真に能く聖人の学を為す者有るを見ず。此の事は君相 力を極めて之を主持するを必とし、豈に一、二の儒生と下任の微官の能く気運を挽回する所ならんや。僕 故(もと)より敢へて命を承けず。如し其の機有りて故(ことさ)らに退托を為さば、罪を孔子に得ること多多たり。況んや僕の貴国を視ること一体たるに同じくして、未だ嘗て少しも中国と異にすること有らざるなり。貴国の邪教に惑ふや、深く骨髄に入り、豈に能く一旦にして豁然たらんや[5]。

朱舜水は日本の江戸と水戸において十七年間（1665-1682）講学し、徳川光圀には治理政治の要諦を四つ授けた。一に曰く、「政教分離と迷信の排除」。二に曰く、「公平な税制の実施」、三に曰く：「大学制度の設置」、四に曰く：「海洋政策の重視」（造船と貿易振興）である[6]。その中でも所謂「大学制度」は聖堂の建設を最重点としていた。光圀は漢学を領内に普及させる必要性を深く理解し、「藩校」を創設して優秀な人材の抜擢を進め、水戸藩の教育政策の根本を定めた。教育振興の基礎となる大計について、朱舜水はすでに早くから周到な計画を建てており、次のように述べている。「古は学を建つるに必ず国都に於いてし、大事は此(こ)こ焉より出だす。其の後 飲至・策勲は之を大廟に行ひて、献馘・献囚は必ず泮宮に於いてするは、聖廟と学校と宜しく相ひ去るべからざる所以なり」[7]ここで朱舜水が言及している「聖

---

4 『西遊手録』については、徳川真木監修・徐興慶主編『日本徳川博物館蔵品録－朱舜水文献釈解－』（上海：上海古籍出版社、2013 年）を参照されたい。
5 朱舜水「答小宅生順問六十一條」、『朱舜水集』巻十一・問答四。朱謙之『朱舜水集』（北京：中華書局、1981 年）、406-407 頁。
6 冲方丁『光圀伝』（東京：角川書店、2012 年）、650 頁。
7 朱之瑜『文苑遺談』巻一、『新訂朱舜水集補遺』、254 頁。

廟」と「学校」、及び孔子の学説とは相互に密接な関係を有する。

本稿は学問の伝播と文化の移植の二つに焦点を合わせて、朱舜水における孔子の形象とその徳川社会に対する影響について論じるものである。

二、学問の伝播より見た、朱舜水における孔子の形象

（一）教養と仁政：朱舜水と徳川光圀

朱舜水は招聘を得て江戸に来て講学した後、徳川光圀が徳政を推し進めていることに深く期待し、まず孔子の「大道の行はるるや、天下を公と為し、賢と能を選び、信を講じ睦を修む」(『禮記・禮運』)という言葉を引用して、水戸藩が日本が大同思想を普及させるうえでの典範となることを望んだ[8]。そして次のように云う、「茲(ここ)に幸(さいわ)ひにして知遇の隆(たか)きに際して、私(ひそ)かに計るに近世の中国は之を行ふ能はざるも、日本は易しと為す。日本に在りては、他人は或ひは之を行ふ能はざるも、上公は易しと為す。惟れ勃然として奮励し、実実挙として之を措(お)くに在るのみ。」[9] 朱舜水は「治道に二有り、『教』と『養』とのみ。『養』は先に処りて、『教』は其の大に居る」[10]と考えており、「聖人の大徳は仁を施すより重きは莫く、仁政の大端は老を養ふより先にするは莫し」[11]と述べている。ここでの「教」に対する解釈は、「父子を親しませ、君臣を正し、名分を定め、上下を和し、安富尊栄せしめて、傾を定め乱を除く」(「元旦賀源光圀書八首」『朱舜水集』巻六・書簡六)というもので、「実実挙として之を措く」とは、すなわち「民生日用を以て先と為し、積徳累仁を以て法と為す。此(か)くの如(ごと)ければ則ち百姓 春台に登るべく、人君の福寿たるや、左券を操(と)りて之を取る」(「元旦賀源光圀書八首」『朱舜水集』巻六・書簡八)ということに他ならない。また、朱舜水は孔子の「君子は恵し

[8] 朱舜水「元旦賀源光圀書八首」、『朱舜水集』巻六・書簡三、113 頁。
[9] 同上。
[10] 同上。
[11] 同上、114 頁。

て費やさず、労して怨まれず、欲して貪らず」(『論語・堯曰』)[12]という言葉を引用して、光圀が為政にあたって、「民が利益とすることによって、民に利益を与える。そうすれば、恩恵を施しても自ら財貨を浪費することがなく、民に労役を命じても民が不満を言うことはない。また、仁徳を追求して財貨を貪らない」ことを望んだ。朱舜水にとって、これこそ仁君が末永く大いに行うべき施政方法であり、光圀が一つ一つ順を追って実行するよう期待したのである。

朱舜水はまた宋の景公が言ったという言葉を引用している。宋の景公が「歳凶なれば則ち民無し、民無くんば吾何を以てか君と為らん」(『史記・宋微子世家第八』)と言ったところ、凶兆を示す「熒惑」の星が天球上を逆行した。また、楚の昭王が病にかかったため、大夫らが郊外でお祓いをしたいと求めると、昭王に拒絶されたという。この故事について朱舜水は、「孔子曰く、楚の昭王は天道を知れり。其の世の永きや、宜なるかな(『左傳・哀公六年』)と云い、「天に譴見ありて、諸卜を観象して、尚ほ惑を為さず」と称賛した。また『詩經』に「永く言(ここ)に命を配し、自ら多福を求めよ」(『詩經・大雅・文王』)とあるのを引用して、「人君の天に命 永きを祈る所以は、是れ其の道理有り」と説き、さらに、『書經』に「皇天親しむこと無し。惟れ徳是れ輔く」(『尚書・周書・蔡仲之命』)、「善を作せば之に百祥を降し」(『尚書・商書・伊訓』)とあるのを引用して、「神の憑依する所は、将た徳に在らんとす」と云う。「徳」と「善」は人君が為政するうえでの重要な価値理念であり、朱舜水は徳川光圀に「人君の慶賞刑威は徳に非ざる無きなり、善に非ざる無きなり。但だ当に克(よ)く永く観、克(よ)く永く省みて、終身之を以てすべし。祇(た)だに一歳の中に競競とするのみに非ざるなり」と忠告している[13]。

(二)孝友誠信、行を顧みて言を謹しむ:朱舜水と林春信

林春信は名を懿、字は孟著、また又三郎と称し、「梅洞勉亭」と号した。徳川幕府の朱子学派の大儒林羅山(1853-1657)の嫡長孫であ

[12] 同上、114頁。
[13] 朱舜水「與源光圀書」、118-119頁。

る。朱舜水は 1665 年に徳川光圀の招聘に応じて初めて江戸を訪れた際、幕府の儒官であった人見竹洞（1637-1696）の書斎で初めて林春信と会った。その後、春信は朱舜水に対して弟子の礼をとるようになり、朱舜水も春信の才能を激賞して、春信は生まれながらにして穎異の人であると言っている。祖父の林羅山も春信を千里の駒と期待をかけ、その年少時の学習過程について、「六歳にして初めて『大學』、唐宋の詩若干首を読み、皆な誦を成す。又た三年して、大父（林羅山）『論』（『論語』）・『孟』（『孟子』）・『中庸』を口授すれば、読過すれば輒ち忘れず。（中略） 年十二にして、『尚書』・『禮』・『易』・『左氏傳』を読む。明年の冬、学士に侍して朝鮮使臣李明彬に往晤し、即ち詩を賦し、再び酬答を為せば、李 大いに之を奇とす。（中略）大父復た『文選』・東坡・山谷諸集を口授して、篤く遷・固の史を号す。人に語りて曰く、「孫は年十三にして、書を読むこと吾が幼時に十倍す」[14]と形容している。春信は、わずか十三歳にしてすでに経書と史書を熟読し、博学卓識にして、しかも詩学にも精通しており、林羅山の大きな期待を受けて、後に幕府に抜擢されて儒官となった[15]。朱舜水は林春信の人品について賞賛し、「沈潜貞静にして、和恵たりて人を愛す。寛裕亮直にして、迫らず阿(おもね)らず。人の善を揚ぐるを好み、己の愆を改むるに勤む。孝友誠信にして、行ひを顧みて言を謹しむ」[16]と述べている。

林春信が曾て朱舜水に、「崇禎年中の巨儒鴻士、世の推す所と為る者は幾人ぞ。願はくば其の姓名を録して示せ」と尋ねたことがある。これについて、朱舜水は「明朝の中葉、時文を以て士を取る。時文とは制挙の義なり。（中略）巨儒鴻士とは、邦を経(おさ)めて弘(ひろ)く化して、

[14] 朱舜水「勉亭林春信碑銘」、『朱舜水集』、598 頁。
[15] 林春信の父である林鵝峰は、幕府の文教事業をつかさどる役目を父林羅山より引き継ぎ、学政をつかさどり、弘文院の学士となった。朱舜水が江戸を訪れた際には、鵝峰もまた表敬している。春信の弟の林春常（鳳岡）もまた朱舜水に学問上の質問をしている。林春信の著作には『史館茗話』一巻、『六義堂雑記』、『梅洞全集』四十一巻、『勉亭詩集』十巻、『興来一哦』一巻、『本朝一人一首評註』十巻がある。
[16] 同注 14、600 頁。

艱難を康済する者なり」[17] と答えた。また、「賀牧は心を傾くること頗る厚く、是れ共に相ひ敦勉して、聖学を興さんと勧めんと欲す。千里の馬を求むる者は、先づ其の骨を市ふとは、従りて来たること旧し」[18]とも述べている。こうして聖学の振興が、二人の間の主要な話題となった。

林春信は若くして志を得たが、惜しむらくは重病にかかり、1666（寛文六） 年九月に逝去した。享年わずか二十四歳であった。春信の逝世後、朱舜水は「勉亭林春信碑銘」を著し、嘆いて云う。「今勉亭の英英たるは未だ見ずして、晩年卓識ありて、乃ち六経を窮捜せんと欲し、身は大道を体し、是れ究め是れ図らば、誠に当世を翼輔するに足れり。斯の人死せざれば、駸として其れ興有らんか。蓋し天、日本の斯文を興すを欲せざらんや。何為れぞ若くのごとき人を生まん。天、果して日本の斯文を興起するを欲せんや。又た何為れぞ若くのごとき人を翦る」[19]。さらに次のように嘆いている。「鼎新たにして故きを革むるに、必ず才賢を生ず。秀実の修短は、夫れ豈に偶然ならん。余厚く是の邦に望むや、俗易ふべくして聖伝ふべし。何為れぞ其れ若くのごとき人に於いてをや。之をして以て穎を脱せしめ、之を靳しむに永年を以てす。吾低徊すれども其の解を得ず、歎きて曰く、「『胡ぞ然く帝の而く、胡ぞ然く天の而し』(『詩經・鄘風・君子偕老』)」[20]。

（三）近裏、己に著く：朱舜水と奥村庸禮

奥村庸禮（1626-1687）はもともと仏教界の人間であったが、後に加賀藩主前田綱紀に協力して漢学教育を普及させる推進者となった。朱舜水がしばしば江戸にある加賀藩の藩邸を訪れていたことから、奥村は学問について朱舜水に質問する機会があり、そうした師弟関係は十餘年の長きにわたった。朱舜水は彼に対して強い期待をこめて次のように述べている。

---

[17] 朱舜水「答林春信問」、383 頁。
[18] 朱舜水「答林春信書」、『朱舜水集』、287 頁。
[19] 注 16 に同じ。
[20] 同上、601 頁。

> 今、賢契は職親くして禄重し。大ひに用ひられて日有り。又た且つ年富かにして力強く、耳聡く目明らかなり。而れども今に及ぶまで学を為さず。一旦大政を参掌すれば、機務填委せり。軽重となく狐疑して、暁暢する能はず。豈に霍子孟・寇莱公の誚りを貽らざらんや。古人云ふ、「世間何物ぞ最も人の神智に益あらん。曰く、「書を読むに如くは無し」(『資治通鑑・晋紀三十三』安皇帝隆安三年)と。然らば則ち読書は、特だに身を修め行ひを正すのみに非ず。人の神智を益す所に適ふ。

奥村庸禮はかつて朱舜水にこう尋ねた。「幼年にして父母を喪ふは、人生の不幸なり。先づ是れ、聖賢の道を知らざるが、故に日用の間、聖賢の規範を尊信する能はず。長ずるに及び、国政の暇あらば、経書に闖すれども、其の理に難渋し、牆に面して処に立ち、遮られて継述の道を行ふに足らず。古に曰く、「亡に事ふること存に事ふるが如くす」(『禮記・中庸』)と。又た曰く、「祭日は室に入らば則ち粛然たり、戸を出づれば則ち粛然たり。容貌声音、洋洋焉として前に在るが如くす」(『禮記・祭義』、『禮記・中庸』)と。忠孝の感応は、自然にして発越する所以なり。凡そ人孝敬を以て君長に事ふれば、則ち忠順失せず、爵禄祭祀、両者守保せん」[21]。

聖学の道について、朱舜水は答えて云う、

> 聖賢の心を持する所以は、君子の道を守る所以にして、其れ力政を得るは多に在らず、只だ一句両句を要して其の要領を扼へて、遂に終身之を用ひて尽きず。此の条の問ふ所の如きは、止だ「亡に事ふること存に事ふるが如くす」(『禮記・中庸』)の句に在り。人の自然と行往坐臥する所は、適きて父母に非ざる無きなり。優然として其の位を見、粛然として其の容声を聞かば、皆な此れ「如存」の念 之を為せるなり。自然と一たび足を挙げて敢へて父母を忘れず、一たび言を出だして敢へて父母を忘れず。孝を以て君に事ふれば則ち忠、敬を以て長に事ふれば則ち順、忠順失せずして、自ら能く其の禄位宗廟を保つ(『孝經・士章』)。

[21] 朱舜水「答奥村庸禮問」、『朱舜水集』、頁 376。

> 孝敬の心は、日に純謹を加へ、聖賢の道は、他に求むる在らず。剛にして撓(たわ)まず、精にして浮(す)ぎざること、是れより過ぎたるは莫し、何ぞ自ら遜(へりくだ)ること多からんや[22]。

ここで朱舜水は、所謂「聖学」つまり「聖賢之道」を広義に解釈している。彼が伝えようとしたのは、為政者は必ず「孝を以て君に事ふれば則ち忠、敬を以て長に事ふれば則ち順」(『孝經・士孝』)という態度と「剛にして撓せず、精にして浮ぎず」という精神を備えるべきだということである。孔子が「五刑の属三千、而して罪不孝より大なるは莫し」(『孝經・五刑章』)と云い、また「臣は君に事ふるに忠を以てす」(『論語・八佾』)と述べていることから、朱舜水は「孝」と「忠」に関する行為と治国とには密接な関係があると考えていた。いわゆる「死に事ふるに生に事ふるが如くし、亡に事ふるに存に事ふるが如くす」(『禮記・中庸』)の精神とは、先人を恭謁するにあたって恰も先人が現世にいるかのように敬意を払うことにあり、これが最も優れた「孝」の行為の体現なのである。

朱舜水は奥村庸禮に、「吾聞く、古より明王は孝を以て天下を治む(『孝經・孝治』)と。未だ已に孝ならずして之を治国と謂ふ者を聞かず、未だ国を治めて人の孝を為すを禁ずる者を聞かず」[23]と忠告し、孔子の「己を行うに恥あり、四方に使いして君命を辱めざるは、士と謂ふべし。」(『論語・子路』)という言葉を引用して[24]、彼が忠孝の精神を実現して本物の藩儒となるよう期待し励ました。

奥村庸禮はまた、「然りと雖も、国俗は欲する所に任ぜず、祭祀長く廃されて、或ひは終遠の志を成さんと欲するも、性情は軟孱にして、気品は麤笨、孝敬の心日に弛み、聖賢の道弥々離る。伏して冀はくは先生の厳諭を示されんことを」[25]と尋ねたことがある。

朱舜水は答えて云う、

---

[22] 同上。
[23] 同上。
[24] 朱舜水「與奥村庸禮書」、『朱舜水集』、255 頁。
[25] 朱舜水「答奥村庸禮問」、『朱舜水集』、376 頁。

> 祭祀長く廃されて国俗欲する所に任ぜざるに至りては、愚謂へらく然らず。公・侯・卿・相は、礼義の司る所にして、作すは則ち上に於いてして、市民の観感して法を焉(ここ)に取る所と為る者なり。国を矯(た)めて俗を革(あらた)むる者有りと聞きて、豈に身を委ぬるに以て故俗に循ふ者有らんや。孔子の孝を問ふに答ふるや、曰く、「生けるには之に事ふるに礼を以てし、死すれば之を葬むるに礼を以てし、之を祭るに礼を以てす」(『論語・為政』)と[26]。

祭祀と礼儀に関して、朱舜水は孔子の「生けるには之に事ふるに礼を以てし、死すれば之を葬るに礼を以てし、之を祭るに礼を以てす」(『論語・為政』)という言葉を引用して、生前に仕えるとき、死後に埋葬するとき、祭祀を執り行うときに「礼」にかなったやり方をすること、これこそが「孝」を尽すことだと説明した。朱舜水はまたこうも述べている。「不佞の孔子に於けるや、啻(た)だに天壌なるのみならず。独り是れ人を誨(おし)へて倦まざるの心は、則ち孔子に於いても少間無きなり。是の故に事に随ひ物に随へば、則ち必ず惓惓懇懇として、言説を楽しむ。而れども学者漠然と聴受すれば、耳を過ぐるや輒ち忘る。介介として独り是れを悪(にく)むのみ」[27]。

最後に、朱舜水は奥村庸禮に学問を進める際の方向性を示して云う、

> 不佞但だ賢契に向学の方を知り、之を政治に推して準有り、後人をして為学の道を知らしめ、近裏に在りて己に著(つ)けて、天下国家を益する有り、純(もっぱ)ら虚脾を弄びて、風を捕へ影を捉ふるに在らざるを要(もと)むるのみ。若し夫れ窃儒の名、乱儒の実ありて、日本をして終ひに儒者の道を知らざらしめ、俗子に詆排せらるれば、則ち罪人たり[28]。

孔子の「近裏、己に著く」とは、深く精髄を求めようとする精神がしっかりと作用することである。

---

[26] 同上。
[27] 朱舜水「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』、272 頁。
[28] 朱舜水「答奥村庸禮書」、『朱舜水集』、274-275 頁。

（四）敏慎と実践：朱舜水と木下順庵

木下順庵（貞幹、1621-1699）は、藤原惺窩（1561-1619）の弟子である京都の朱子学者松永尺五（1592-1657）に師事し、後に加賀藩に漢学教育を普及する導師となった。朱舜水が逝世した 1682（天和 2）年、木下順庵は幕府の儒官となり、同時に第五代将軍徳川綱吉（1646-1709）の侍講となった。日本の国立公文書館「内閣文庫」には木下順庵が朱舜水に送った十七通の書簡が遺されており[29]、二人の思想交流を研究するうえで欠かせない重要文献となっている。

『先哲叢談』（巻三）の記載によれば、木下順庵は日本の古学の開祖であり、「曠古の偉器、一代の通儒」である。順庵は、朱舜水に送った書簡の中で、「幹嚮に東武（江戸） に在りて、私かに自ら計る、敝寓と貴館、鄰近なること咫尺なれば、須当く日に左右に候ひて、玄論を飽聆すべしと」[30] と云う。朱舜水の彼に対する印象は「文苑の宗、人倫の冠、夫れ典謨・子・史を博綜して、孔・孟・程朱を研窮す。逖きかな、名を西士に聞く。晩きかな、東都に相ひ見ゆ。身体力行して、格致の餘瀋を拾ふを須いる無くして、意誠にして心正しく、自ら能く理気の膚言を怯く」[31] というものだった。二人の交際は、江戸で始まった。朱舜水はかつて順庵に向かって「今貴国の君（藩主前田綱紀） 英年にして駿発し、慨然として聖賢の学に志す有るは、斯ち貴国の福なり」[32] と述べたことがあり、順庵が加賀藩で聖賢の学を推進するために行動することを期待した。また朱舜水は「国君民を建つるに、教学をば先と為すは、其の文辞の遐暢し、黼黻皇猷を欲するのみに非ず、誠に道を興し治を致し、風を移して俗を易へんと欲すればなり」[33]と云い、聖賢の学を普及するには教学を先にすべきであり、聖賢の学を推進することに自信をもつよう強調している。続けて、

---

[29] 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』、127-137 頁。
[30] 木下貞幹「與朱舜水書十首」、『朱舜水集』、772 頁。
[31] 朱舜水「謝木下貞幹啓」、『朱舜水集』、203 頁。
[32] 朱舜水「答木下貞幹書」、『朱舜水集』、202 頁。
[33] 同上、201 頁。

> 聖賢の学は、之を行はば則ち必ず至り、之を為さば則ち必ず成る。之を農夫に譬ふれば然り、深く耕せば耨(くさぎ)り易く、則ち堅好穎栗たり、鹵莽に之を布(し)けば、則ち滅裂して之に報ゆ。他道の荒繆にして、望むべきも即(つ)くべからず、喜ぶべきも食ふべからざるの若きに非ず[34]。

と云い、聖賢の学の尊さは実践の理念にあると説いた。

この他、朱舜水は順庵に対しても「敏」と「慎」という為学の態度について言及している。朱舜水の説によれば、「敏なる者は事を見て風生ずるも、或ひは失すれば則ち躁たり。慎なる者長慮して卻顧し、或ひは失すれば則ち蔑たり。若し夫れ慎密鎮静にして能く機を迎へ窾に導き、英俊 果毅として、之を本とし持重安詳すれば、此れ殆ど徳を全うせり」[35] ということになるが、これに対して木下順庵は答えて次のように云う、

> 夫れ「敏」「慎」は学を為すの要たり、敏にして躁に思はず、慎にして蔑に失せずんば、此れ乃ち君子の全徳にて、幹何ぞ敢へて万一を望まん。『傳』(『左傳・昭公三年』) に曰く、「仁人の言、其の利、溥(ひろ)きかな」と。今乃ち贈言の訓を以て、之を座右に顔し、仰ぎ観て俯き訾し、昼に誦(とな)へ夜に思ひ、孜孜勉勉せば、得る所有る者の若し[36]。

朱舜水が七十歳になって、何度も徳川光圀に高齢を理由に帰郷を願い出た。これについて、順庵は云う、

> 夫れ執政の心は、則ち公の心なるのみ。公 之を留めんと欲す、故に執政之を留む。公の留むる者は豈に徒らならんや。蓋し其の志は先生に依りて相ひ与(とも)に為す有りて、以て斯道を東方に興さんと欲するのみ。凡そ事の成らざるは、以て志の立たざればなり。苟も志の立つ有らば、未だ事の成らざる者有らず。此れ幹の其の終ひに必ず成る有るを知る所以なり[37]。

---

[34] 同上、202 頁。
[35] 朱舜水「敏慎」、『朱舜水集』、502 頁。
[36] 木下貞幹「與朱舜水書」、『朱舜水集』、772 頁。
[37] 同上、776 頁。

木下順庵は、徳川光圀が朱舜水を慰留したのは、「斯道を東方に興」さんとしたためであり、最後にはこの大願は必ず成就されるものと考えていたのである。

（五）身を敬しむを大と為す：朱舜水と古市務本

古市務本は、別名を清原季敬といい、加賀藩の若い儒者である。また彼は、前述の奥村庸礼の娘婿であり、また朱舜水が深く期待を寄せた門下生の一人でもあった。為学の方法について、朱舜水は古市務本に、「躬(みづか)ら行ふの外、更に学問無く、所謂「帰りて之を求むれば、餘の師有り」「『孟子・告子下』」とは、斯くの如きのみ。足下は年少(わか)くして禄重ければ、当に親の恩に居るは至つて報い難しと為すを念ずべし」[38]と云い、さらにこのように述べている。

> 足下は公餘の暇あらば、惟(た)だ読書在るのみ。一ならば則ち日に損友を遠ざく。古人日に益ゝ親しめば、則ち路境日に益ゝ熟す。匪人日に益ゝ遠ざからば、則ち身を持すること日に益ゝ高し[39]。

朱舜水はまた云う、

> 学ぶ者は躬ら行ふの心得を以て主と為して、之を潤色するに文彩を以てす。文字を以て主と為し、之を潤色するに徳行を以てすべからず。能く其の本末先後を知らば、則ち庶幾(ちか)からん。之に勉めんかな[40]。

ここで、朱舜水はまず実践と孝行、徳行の正しい方向性について伝えているのである。

朱舜水はかつて古市務本のために「典學齋記」を書いた。該書は為学における数多くの理念を説いたものである。朱舜水は云う、

> 人の学に資する所以の者は何ぞや。蓋し前人の学や已に成り、之を著くる所以を即ち「教」と為す。後人の学や、未だ成らずして成るを求む。因りて以て古先聖賢の道に循ひて之を為すは、斯ち「学」たり。学の人に於けるや、其れ柯を執り柯を伐(か)るな

[38] 朱舜水「與古市務本書」、『朱舜水集』、330 頁。
[39] 朱舜水「答古市務本書」、『朱舜水集』、334 頁。
[40] 同上、333 頁。

らんか。今の人は学を以て戯と為し、邯鄲の歩履・優孟の衣冠、皆な学と為せり。或る者は学を以て市と為し、其の天爵を脩め、以て人爵を要む。既に人爵を得れば、其の天爵を棄て、皆な学と為せり。怪しむ無し、終身学を為して、終身未だ之を学ばざるを[41]。

簡単に言えば、朱舜水の理想とする為学の道とは、古の聖賢の道に従うことである。実践方法について、朱舜水はこう続けて云う、

夫れ学は、人たるを学ぶ所以なるのみ。子臣弟友は皆な学を為すの地、忠孝謹信は皆な学を為すの方、出入定省は皆学を為すの時、詩書執礼は皆な学を為すの具なり。終身学の中に処りて、一心学の外に越え、古聖先賢の如きを求めんと欲するや、其れ得べけんや。「玉は琢(みが)かずんば器を成さず、人は学ばずんば道を知らず」(『禮記・學記』)、之を典学に始むるなり。一息して尚ほ存し、此の志少しも懈(おこた)るを容(ゆる)さず、之を典学に終ゆるなり。終始学に典して、学成らざる者有らんや。焉(ここ)に歌ひ焉に誦し、焉に泳ぎ焉に游びて、学びて典ならざる者有らんか[42]。

朱舜水がこの年若い儒者に切実な期待を寄せていたことは明らかである。

この外に、釈奠習儀をいかに押し広げて理解していくべきかについて、朱舜水は古市務本が自ら体験し、伝承することを望み、次のように云う、

釈奠習儀は、名は三献と雖も、其の実一献なるのみ。足下は未だ観礼に与(あずか)らずと雖も、何ぞ之を歉恨すること深きや。宰相上公は五廟の祭礼を習はんと欲す。五廟に犆有り祫有り、儀文は曲折たりて、節目は周詳たり。若し精心もて探討するに非ずんば、豈に能く幽明に裨すること有らんや。不佞は学者の泄泄として玩忽するを見て、両年来懇懇として辞に力め、上公も意を

[41] 朱舜水「典學齋記」、『朱舜水集』、487-488 頁。
[42] 同上、488 頁。朱舜水が加賀藩に伝えた学問については、徐興慶「朱舜水思想與加賀藩儒教發展再考」(徐興慶編『朱舜水與近世日本儒學的發展』所収、台北：台大出版中心、2012 年、339-360 頁) を参照されたい。

> 堅くして此を習はんと欲して、今秋冬の間に当に挙行すべしと想ふ。礼儀既已に卒に備はり、初学の勢難卒に成る。明年足下都に入りて、正に演繹の際に在り、方当に賢者と情文を講貫し、礼教を修明すべし。其の大なる者を知れば、則ち其の小なる者は挙げて之を措くのみ、深く嗟くに足らざるなり[43]。

朱舜水は「清原季敬名務本説」の中で、多くの孔子思想を伝えている。例えば、彼は云う、

> 孔子曰く、「君子は敬まざること無し。身を敬むを大なりと為す」（『礼記・哀公問』）と。然らば則ち身を敬しむは、敬の本なり。君子は本・敬に従事すれば、功要にして行立ち、操約にして用宏し。末に従事すれば、則ち雑思して緒無く、勤苦して成り難し[44]。

朱舜水は「清原季敬」の名を解釈して次のように云う、

> 其の原を清め、其の本に務めて、其の徳成らざる者有らんや。事に従ふ者は、之に務むるなり。其の原を清むる者は、知なり。其の本に務むる者は、行なり。是くの如くすれば則ち万事万物、均しく此に橐籥すせん。務むる所を知らざるべけんや[45]。

ここに看取されるのは、朱舜水が「事親」・「守身」・「敬身」は一敬に統べられると伝えていること、そして、学問の吸収はみな誠心に帰すべきである、という考えを強調してることである。

（六）釈奠の習儀、浅移に黙化す：朱舜水と服部其衷

服部其衷は加賀藩（現在の石川県）の儒者である。幼くして加賀藩家老奥村庸礼之介の知遇を得て、朱舜水に学び、今井弘済・安積澹泊・下川三省らと同じく朱舜水の直弟子となった。1672 年（寛文 12） 年冬、徳川光圀が朱舜水に釈奠礼について詳しく説明するように依頼し、自ら多くの儒生を率いて水戸の学官において釈奠礼を習い、その儀注を改定したのは、まさに当時の日本儒学界の一大盛事

---

[43] 朱舜水「答古市務本書、『朱舜水集』、335 頁。
[44] 朱舜水「清原季敬名務本説」、『朱舜水集』447 頁。
[45] 同上、447-448 頁。

であった。日本儒学界では釈奠礼が廃れて久しく、初めて習うこともあって水戸の儒生らはしばしば間違いを犯したが、ただ服部其衷だけが能くその任にたえた。朱舜水は古市務本に送った書簡の中で、服部其衷を次のように讃えている。

> 礼を習ふの一節に至りては、通場未だ其の右に出づる者有らず。但だに其の右に出でざるのみならず、即ち多年礼を習ふの儒も、亦た能く之に及ぶ者有る無し。次第に従容として、礼に違錯無く、呉せず傲らず、柔順温和にして、謂(おもむ)はざりき、其れ遂ひに能く此に及ぶ。彼独り人の為し難き所に任(た)へ、簡使を択ばず。若し更に之に加ふるに端詳荘重を以てし、雝粛の宜しきを得れば、則ち大いに善し。其の他も亦た一、二の事は観るべき有りて、異日或ひは能く長進せんも、亦た未だ知るべからず。惜しかな、観摩して以て善を為すべき無かるのみ[46]。

その後、朱舜水は典礼を行うことがある際には、必ず服部其衷を補佐役とした。服部其衷は「寄朱舜水書」の中で云う、

> 衷は老師の教育を蒙ると雖も、自ら童騃なるを恨む。茫として知識無く、適(た)だ蠡を以て海を量るが如きのみ。豈に能く其の涯を測らんや。惟だ天仮の遐齢を冀(こひねが)ひ、他日庶幾(こひねが)はくば高義の道に及ぶべきのみ。両年以来釈奠習儀して、進退雍容たりて、礼儀卒ひに度あり[47]。

また、服部其衷は朱舜水が押し広めている釈奠習儀に対する日本各方面からの反応を形容して云う、

> 宰相様（徳川光圀）謂へらく、「十数百年未だ之れ礼有らず、先生以て日本の人に教ふるは、莫大の恩なり」と。加賀守殿（前田綱紀）謂へらく、「先生は此の礼を以て後人に教ふるは、乃ち先生の莫大の功なり」。賀国多くの士謂へらく、「三代の礼儀は尽く斯に在り」と。凡そ観る者称賞せざる無く、歎服して曰く、「図らざりき、礼意の美は、廼ち此に至れり」と。或ひと曰く、

[46] 朱舜水「與古市務本書」、『朱舜水集』、329-330 頁。
[47] 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』、125 頁。

「一たび此の地に至るや、厳ならずして粛たり、憍慢の気覚えずして銷鎔して頓に尽く」と。其の間、老成の人に泣下る者有るに至るは、此れ僅かに老師の緒餘なるのみ。若し老師の大道をして行ふを得しむれば、吾が国の魯に至り道に至るは、如何なる観を作すかを知らざるなり[48]。

釈奠習儀は人知れず周囲を感化していき、次第にその効果を表していったのである。

1673（寛文 13）年夏、七十四歳の朱舜水は伝染病に罹った。一晩中高熱が続き、汗が止めどなく流れ、ひたすら吐きどおしで、粥すら喉を通らず、朱舜水自身も覚悟を決めたほどであった。その間、薬湯や身の回りのことなどは、すべて服部其衷の介護に頼り、ようやく完治したという。

三、朱舜水の「孔子賛」と「聖像賛」

朱舜水が、日本に寓居する以前、ベトナムと長崎を往来していた頃、日本で孔子の学説を推し広める構想を抱いていたことは、次の一文からも証明される。

近く、海舶中に多く書を購ひ得ること多く、珍蔵する者は侈(おご)りて美観を為し、記誦する者も亦た書簏を成す。其の君、其の相及び其の通国の豪傑、均しく未だ作りて之を興す者有るを聞かず。瑜今年交趾より復た日本に来たりて、仲尼を崇信する者三人を得たり。其の二は乃ち父子に在り。夫れ家学は淵源にして、謀を貽(おく)るに穀を式(もつ)てし、誠に異事に非ず。然れども其の俗は浮屠を尚び、千年沈錮して、独り此の二人なる者有るのみ。卓乎として特に立つは、真に乃ち是の父是の子なり。『易』に曰く、「鳴鶴陰に在り、其の子之を和す」（中孚・九二）と。『書』に云はずや、「厥の子乃ち堂するを肯ぜず。矧んや肯えて構えんや」（『尚書・大誥』）と。劉歆の学は尚ほ其の父に叛けり。況んや徼外の国に在るをや。瑜 深く之を嘉(よみ)し、其の請ふに因りて楽し

[48] 同上。

みて之が序を為す。仲尼の序（原注：今按ずるに、「序」字、疑ふらくは誤りなり）有らざるも、秦・楚に進みて在るが若きや。『賛』に曰く、「一幅の装軸、一幅の片紙、一般の手筆、一様の形似。如来を画かずして、廼ち孔氏を画けり。弥陀を念ぜずして、乃ち経史を誦す。是れ寧ろ子の以て其の父を承くか、抑〻(そもそも)将た父の以て其の子に伝へしか。惜しいかな、我将に西帰せんとして、匆匆として行李し、未だ此の両人を見て、其の面に命じて其の耳に提(ひさ)げず。日有り、大道昭明たらば、胡ぞ能く爾ら喬梓を舎てん[49]。

朱舜水は孔子の道を称えて云う、

仲尼の道は、大なること則ち天に則り、明なること則ち日に並ぶ。心有りて以て溺るるを援け、位無くして時を憂ふ。六経を表章し、七聖を丕承し、八荒を覆冒し、九有を焜煌たり。豈に形容彷彿の肖(に)せるべく、語言文字の尽すべく、支流小道の擬議すべけんや。然れども中国に在りては、帝王の治或ひは盛衰有れば、則ち仲尼の道も固より明晦有り。況んや日本に在りては、国小なれども法立ち、気果つれども生を軽んじ、結縄して理むべく、地に画(えが)きて牢とすべく、此より前に、未だ孔子の教有るを聞かざるなり。故に礼義を好みて未だ礼義の本を知らず、廉恥を重んじて廉恥の初に循はず。一旦人有りて、孔子の道を以て之に教ふれば、行はれて且つ民は皆な尭・舜たりて、比屋封ずべし。寧(いずく)んぞ止だ八条の教は朝鮮のみならんや[50]。

また「聖像合圖四配賛」の中でも、孔子の道に言及している。

孔子は百王の大成を集め、道則ち高く、美なり。然らば則ち其の道は能くすべきか。能くすべからざれば、則ち及門に宜しく顔・曾有るべからずして、私淑に宜しく孟子有るべからず。如し能くすべんば、則ち至親は父子に如く莫し、何を以て之を伯魚に伝へずして、子思子は復た曾氏より其の宗を得たる。学を

[49] 朱謙之『朱舜水集』、560 頁。
[50] 同上。

好むと学を好まざるとは、其の人に存するを見るべし。天の得て之を私する所に非ざるなり、父と師との得て之を私する所に非ざるなり[51]。

朱舜水はこのほかにも「孔子賛」三首を著している。

第一首に云う、

誠にして明、明にして誠なるは、聖人なり。進むに礼を以てし、退くに義を以てするは、聖人なり。思はず勉めずして、従容中道なるは、聖人なり。達すれば善を天下に兼ねんと欲し、窮まりて乃ち独り其の身を善くするは、聖人なり。滔滔として皆な是(ぜ)なり、天を悲しみ人を憫(あわれ)むを忘れざるは、聖人なり。和して流れず、中立して倚らざるは、聖人なり。善を陳べて邪を閉ぢ、君心の非を格して、天下をして其の福を蒙らしむるは、聖人なり。怨みず尤(とが)めず、下学上達して、世、予を宗とする莫きも、後代の帝王之を宗とす。我を知るは其れ天か。而れども千百世の英賢明哲、愚夫愚婦、以て薄海の内外に及ぶまで、之を知らざる莫し。此を舎(お)きて図(はか)らず、而して之を章甫縫掖、尭顙禹腰に図(はか)るも、蓋し亦た末なり。即(たと)ひ使(も)し形容甚だ似るも、陽虎も嘗て孔子に貌似せざらんや[52]。

第二首に云う、

聖人を伝ふる者、要は其の誠と明とを伝ふるに在りて、其の音と声とを伝ふるには在らず。聖人を求むる者、但だ当に之を権と教とに求むべくして、当に之を笑と貌とに求むべからず。苟も能く之を羹に見、之を墻に見れば、是れ即ち所謂る「聖謨洋洋たり、嘉言孔だ彰らかなり」(『尚書・伊訓』)なり[53]。

第三首に云う、

三王畢りて、素王出づ。万古を亘(わた)るも、教へは惟れ一なり。文は彬彬、本は忠質。上律下襲して、憲章祖述す。滔滔として已

[51] 朱舜水「聖像合圖四配賛」、『朱舜水集』、561 頁。
[52] 朱舜水「孔子賛」、『朱舜水集』、557 頁。
[53] 同上、558 頁。

に皆な是たるを知れば、何ぞ乃ち周流して失する無からん。世を挙げて予を宗とする莫しと雖も、寧んぞ敢へて自ら遑(いとま)ありて暇逸せん。海藉に浮びて「桴に乗らん」と曰ひ、彝に居りて且つ已に日永(なが)く、疑ふらくは天下の清と為り、終に是れ声名洋溢せんか[54]。

これらの主眼は、孔子が聖人たる所以を説明し、みなに千百世の英賢明哲の道を発揚せんと呼びかけることにある。同時に、聖人の道の尊さは誠・明・教の道理にあるとも伝えている。

その他、『朱舜水集』には「聖像賛」四則が収録されている。その内容は次のとおり。

（一）

往きて返るべからざる者は年なり、至りて加ふべからざる者は日なり。科を盈たして進むも、苟も本無ければ、涸れても立ちて待つべし。大禹聖王は寸陰を致惜し、孔子聖人は流水を興懐す。学者、悠悠たる歳月に、逝くも悔ひざるは、亦た独り何ぞや[55]。

（二）

此より前に仲尼無くんば、則ち尭・舜之道は、衰周に際して絕ゆ。此より後に仲尼無くんば、則ち物則民彝は、今に至るまで殞滅す。百王を集めて以て大を成し、文明を匯(あつ)めて睿哲たり。若し乃ち日月晦くとも種(う)え鋤(す)くを嘉(よみ)せば、陰の噎噎として莠の桀桀とするを懼るる無し。志有る者 明徳を天下に明らめんと欲すれば、奈何ぞ夫の聖教をしてこれ銷蔑に淪(しず)ましめん。自評にいふ、聖教今に至るまで地に墜ちざること綫の如し。恒に居りて感有り、故に是に因りて以て之を発せり[56]。

（三）

唐・虞に比隆すれば、庶幾(ほとん)ど昌にして熾ならんか。左麟右鳳、夫れ孰(いづ)れか夫子の志に非ざらんや。期月にして可、三年にして

[54] 同上注 3、558 頁。
[55] 朱舜水「聖像賛五首」、『朱舜水集』, 558 頁。
[56] 同上、559 頁。

成す有るに、何ぞ終ひに之を試むるもの莫きか。天は自ら悲しむ能はずして夫子之を悲しみ、人は之れ自ら憫れまずして夫子之を憫れむ。当年其の蘊を殫す能はざるも、万世乃ち其の賜を受くるか[57]。

（四）

世の人、聖人を艷称し、旦暮にして弋獲すべしとす。而して夫子の道は、必ず家庭日用に由り、君臣父子、道に達し徳に達し、身体力行して、銖積寸累し、善信美大たりて、而る後聖神に幾ければ、則ち「頓」と「漸」と相ひ万万たるなり。世の人競ひて禍福功罪を談ずるは、俄頃に顛倒すべし。而して夫子の道は、必ず人心道心を曰ひて、兢兢業業して、敢へて逸予せず、敢へて怠荒せず。是に於いて諍臣・諍子・厳師・益友有りて、其の闕遺を補ひ、大道を之くを掖けて、而る後粋美に臻る。其れ不善を作す者有、ただ之を百殃に降すのみならず、而して且つ孝子慈孫、百世改むる能はざれば、則ち「懼」と「恃」と相ひ万万たるなり。宜なるかな、世の徼倖にして速やかならんと欲する者の喜ぶ所と為らざるや。幸にして夫子の道は、事事に拠有り、言言徴すべし。火を燧に取りて水を方諸に取るが如く、錙銖毫髪も爽はず。治国平天下に志す有る者は、此を舎いて、其の道に由る無きなり。然らずんば、其の世の弁髦敝屣する所と為りて唾棄せらるること久し[58]。

この四つの「聖像賛」は、朱舜水が明徳を天下に明らかにしようと志す者たちや、国を治め天下を平和にしようと考える者たちのために書かれた。朱舜水によると、為政者は必ず「人心」と「道心」を身につけ、かつ「恐れつつしみ、怠惰に流れず、なげやりにならない（兢兢業業として、敢へて逸予せず、敢へて怠荒せず）」という精神を備えるべきである。また政治家は、道徳上の「聖学」をどのように推し広めるかという問題を常に考えなければならない。これ

[57] 同上、559頁。
[58] 同上、559-560頁。

らは、孔子が常に言う「家庭日用」および「身体力行」という実学の形象を打ち出したものと言えよう。これらの考えと朱舜水が日本で積極的に伝えた「経世済民」という実学思想とは、その方向性が一致している。

四、朱舜水の『学宮図説』と「学校議」

（一）『学宮図説』における孔子の形象

1670（寛文 10）年、朱舜水が七十一歳の時、徳川光圀は水戸藩の儒教学説を普及させるために、『學宮圖説』の作成を舜水に依頼した。朱舜水は古今の学宮について協議し、細部を明らかにし、外からは見えないところまではっきりさせ、見る者は正確にその構造を把握できた。同時に、梓匠にその図に基づいて木で三十分の一の縮小模型を作らせたのである。『学宮図説』における屋根の棟梁や垂木、殿堂の構造などについて、梓人がよく分からない箇所は朱舜水がみな自ら指さしながら説明し、文廟・啓聖宮・明倫堂・尊経閣・学舎・進賢楼・廊廡・射圃・門楼・牆垣など、全てが精巧にできあがった。現在の東京最大の孔子廟「湯島聖堂」は朱舜水の『學宮圖説』に基づいて建造されており、その聖堂に掲げられている孔子の像は朱舜水が舟山より持ってきた「三尊孔子像」の中の一つである。

学宮（孔子廟）の設計について、朱舜水のとった方法はまず図面で規格や寸尺を書き、次に儒臣の小宅生順と野伝らを設計に参与させるというもので、これは学宮に関する知識を伝承可能な学問にすると同時に、さらに徳川社会に広めようとしたものである。幕府も儒教の儀礼と制度・精神の養成を一千万世の後の世にまで残る文化事業であると考え、湯島聖堂の絶えざる大規模改築の過程で、何度も朱舜水が指導して作らせた模型を取り寄せては指標として参考にした。幕府は祭祀を通して、倫理道徳の知識を日本の一般民衆にまで推し広めたいと考えていたのである[59]。当時、朱舜水は学宮を駒

[59] 倉員正江「『舜水朱氏談綺』編纂をめぐって―『大日本史編纂記録』を資料として―」,『融合文化研究』 第 4 号，2004 年，147 頁。

籠の別荘に建てて、釈奠礼の演習を行い、礼典を折衷して、儀注を定めた。眉も髪も白くなった朱舜水は儒家の正装を身につけ、連日のように城下の士族の子弟らを従えて指導した、その立ち振舞には一定の作法があり、その居並ぶ様は「洙泗」（孔子と儒家）を彷彿とさせたという。「観る者 称賞嘆服せざるなくして曰く、「図らざりき礼儀の美 此に至れるを」と。或ひは曰く、「一に此の地に至れり。厳ならずして粛たり。武人驕慢の気、覚えずして銷鑠して頓に尽けり」と。老成人 涙下る者有るに至る。明徳の馨、人をして薫陶興起せしむるもの此くの如し」[60]。この盛況ぶりについては、『文苑遺談』（巻一）でも言及されている。

> 今聞く、郭中の地は、縦広各〻五十歩、廟堂・斎舎は、儘く地を量りて之を為るべしと。時下の生徒甚だしくは多からざれば、斎舎必ず自ら餘有り。異日生徒衆多なれば、学舎に至るも容る能はず。此の時別に恢廓するを議すれば、則ち事事皆な美挙と為り、人情として歓欣踴躍して、従ふを楽しまざる無からん。此くの如くなれば則ち上公の今日の盛徳大業は、且に四国の興観する所と為り、京師も亦た来りて法を取らんとす。誠に四国の人情を見れば、皆な上公の挙動を以て正鵠と為す。小しく不善有らば、則ち人情解体し、聖教興らず。之を行ふに其の道を得れば、則ち上公は聖教の首功にして、日国興賢の鼻祖と為る。四方且に尸して之を祝はんとし、孔子と与（とも）に永永に不磨たらん。又た何ぞ長慮却顧すること之れ有らん。人の不才は、孫皓・苻生に至らず、必ず毀つこと聖廟に及ばず、又た過慮に煩ふこと無きなり[61]。

（二）釈奠礼の学習と儀注の改定

1672年の冬、朱舜水七十三歳の時、水戸藩の彰考館が落成すると、徳川光圀は朱舜水に学生を指導して釈奠礼を学ばせるよう依頼した。さらに、儀注を改定して礼節の詳細を明らかにし、水戸藩士に孔子

[60] 安東守約「悼朱先生文」、『朱舜水集』、737頁。
[61] 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』、255頁。

の祭祀儀礼について研究学習させるよう求めたのである。翌（1673）年、舜水は再び別荘にて学官を集めて習わせ、その結果、水戸の儒学者らは全員その祭祀儀礼に精通するに至った。これについて、『桃源遺事』は次のように伝えている。「延宝元 （1673） 年、義公（光圀）学宮を水府に刱建し、大いに文教を興さんと欲す。先生をして親ら梓人に指授して学宮の木様を為らせ、又た小宅生順・野傳をして其の事を論定せしむ。先生二子に書を復して曰く、「上公（光圀）は賢君なり、聡明睿智にして、不世出の主なり。茲に数千年未だ有らざるの業を建て、之を千万世の久しきに垂れんと欲す。誠に宜しく熟講して之を安行し、天理に合し、人情に宜しく、後日 以て悔ゆる無かるべし」[62]。

その際、朱舜水は小宅生順と野伝に向かって聖廟と学校の関連性について説明し、まず次のように述べた。

> 古は学を建つるに、必ず国都に於いてし、大事は此焉より出づ。其の後、飲至策勲は之を大廟に行ひて、献馘献囚は必ず泮宮に於いてす。聖廟と学校と宜しく相ひ去るべからざる所以なり[63]。

また、次のように云う、

> 古は人を爵するには必ず朝に於いてし、人を刑するには必ず市に於いてするは、徒だに之に予へ之を棄て、衆と与に之を共にして、王者敢へて自ら専らせざるを示すのみに非ず、亦た厲世磨鈍する所以なり。厲世磨鈍の大なる者は、学宮より大なるは莫し。農夫の子も、以て之を司馬・司徒に升して、官材を辨論すべし。簪纓の胄も、以て之を郊遂に移して、逸志を創懲すべし。一升一沈の間、人目憤発して善を為して、其の邪慝の思を銷阻せざるを得ず。是に於いて国は成徳達材の用を藉り、家は温恭孝弟の規を裕め、至善に法るなり。聖廟の宜しく学校と懸隔すべからざる所以なり[64]。

---

[62]『文苑遺談』巻一。『新訂朱舜水集補遺』、253-254 頁。
[63] 朱謙之『朱舜水集』、322 頁。
[64] 同上。

さらに、聖廟を建てた後は学校はどのようにすべきか、また、どのようにしてそれを推し広めて実践するべきなのか。これらについて、朱舜水は次のように説く。

> 既已(すで)に廟を立つれば、朔望に必ず当に行香すべし。若し上公親(みずか)ら行ひて、衆官随はざれば、則ち威儀粛ならず、号令申(の)べず。若し衆官必ず従ひて行はんと欲すれば、則ち車馬人徒、労煩過ぐること甚だしく、毎月両次は、人情として堪へず。未だ行はずして風雨に遇へば、止めざるを得ず、已に行ひて風雨に遇へば、帰らざるを得ず。弛廃の端は、便ち此より始まる。且つ上公帰闕の後は、必ず須く処守摂行して、事を執ること恪(つつ)しむ有るべきも、恐らくは始終一の如くし難し。之を守廟の人員に委ぬれば、重軽足る無し。是れ廟を遠くすることの不便なるの一なり[65]。

そしてその執行方法について、朱舜水は詳細に解説して云う、

> 春秋の二仲には皆な丁祭有りて、牲を牽き牲を繋げ、牲を視、牲を点すること、皆な先づ一日に行礼して、須く国君親ら行ふべきを要す。卿・士大夫各〻執事有り。遠ければ則ち帰れば復た往き難し。必ず当に斎宮を建立すべく、又た須く別に建つるべし。此くの如くすれば則ち工費浩繁たりて、従官及び随役、尚ほ止宿の処無し。是れ廟を遠くするの不便なることの二なり。即(たと)ひ或ひは宜しきを権(はか)りて廠を立て、雨露霜雪蔽少なきも、四(よ)もに屏障無く、下に架閣無くんば、風湿を駆禦する能はず。官徒は労勤饑疲して、転(うた)た困怠を生じ、風寒の侵す所、或ひは二三人少しく病患を生ずること有り。愚人の心は、猜嫌に致り易ければ、必ず「孔子は至聖なり。之を祭るも福を致す能はずして、反て以て災ひを生ぜり。誠に我が仏の霊感に及ばず」と謂ふ。且つ官民真に能く聖教を崇信するに非ずして、特だ上公の勧諭の切なるを以てすれば、稍稍(やや)其の志を二三す。一旦悦ぶべきを見ずして、徒らに畏るべきを見れば、則ち仏に事ふるの心、前

[65] 同上。

に較べて益〻堅し。是れ上公之を誘ひて正を為さしめんとして、反て之を仏に従ふに駆るは、則ち深く盛心に負(そむ)く。是れ廟を遠くするの不便なる三なり[66]。

水戸から江戸までは距離も遥かに遠く、もし聖廟を祭るとなれば、水戸藩の人々をいたずらに奔走させ疲労させることになり、現実的に障害が多く実行困難であろう。したがって、朱舜水も「変通」的方法を提案し、次のように云う、

今聞く、郭中の地は、縦広各〻五十歩、廟堂・斎舎は、儘く地を量りて之を為るべしと。時下の生徒甚だしくは多からざれば、斎舎必ず自ら餘有り。異日生徒衆多なれば、学舎に至るも容る能はず。此の時別に恢廓するを議すれば、則ち事事皆な美挙と為り、人情として歓欣踴躍して、従ふを楽しまざる無からん。此くの如くすれば則ち上公の今日の盛徳大業は、且に四国の興観する所と為りて、京師も亦た来りて法を取らんとす。誠に四国の人情を見れば、皆な上公の挙動を以て正鵠と為さん。小しく不善有らば、則ち人情解体し、聖教興らず。之を行ひて其の道を得ば、則ち上公は聖教の首功にして、日国興賢の鼻祖と為り、四方且に尸して之を祝はんとし、孔子と与(とも)に永永に不磨なり。又た何ぞ長慮却顧すること之れ有らん。人の不才は、孫皓・苻生に至らず、必ず毀つこと聖廟に及ばず、又た過慮に煩ふ無きなり[67]。

野節はかつて、国家の根本を為す道がどのようなものかを朱舜水に尋ねたことがあった。舜水はこう答えている。「君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友は、天地の間の定位なり。士・農・工・商は、「国の石民なり」(『管子・小匡』)。「男耕して食はせ、女織りて衣す」(『商君書・画策』)は、民生の常経なり。所謂る「本根」とは、斯くの如きのみ。而して又た「壮者は暇日を以て其の孝弟忠信を脩む」(『孟子・梁恵王上』)と。国何ぞ治らざるを患へん、何ぞ富まざるを患へん、何ぞ

[66] 同上、322-323 頁。
[67] 同上、323 頁。

浮文末節を事とせんや。末節を以てして治めんと図るは、是れ猶ほ糸を理(おさ)めて之を禁するがごときなり。吾未だ其の能く治むる者を見ず[68]。」

（三）『舜水朱氏談綺』中の孔廟図録

『舜水朱氏談綺』は徳川光圀が生前に企画した重要な文献の一つであり、宝永元（1704）年に書かれたと推測される。該書は上・中・下三巻からなり、「大成殿」建設の件にも言及している。上巻は人見又左衛門懋斎による編集で、もともとの書名は『朱氏談綺』と云い、朱舜水の門下生である安積澹泊の序が付されていた。懋斎は若い頃より光圀の近侍を務め、後に朱舜水に師事した。中巻は、さらに「中之本」と「中之末」に分かれ、孔子廟などの図録と『改定釋奠儀注』を収める。下巻は「事物名称」を「天地」「居処」「人倫」「形体」「衣服」「飲食」「宝貨」「器用」「禽獣」「鱗介」「米穀」「草木」等の語彙に分類したもので、注として和訓と説明文が付加されている。これらの語彙は、主に過去に朱舜水が使用した漢語の語彙を蒐集して彰考館館員に中国語として学ばせたものであるが、さらに水戸藩に漢学を普及させるために役立てようとしたのである。なお、『舜水朱氏談綺』の序は、舜水門下の今井弘済によって書かれた。

「大成殿」建設の件については、『耆舊得聞』[69]において次のように触れられている。「義公は学校を建てんと欲して、先生に闕里の図を詢問す。先生工に命じて之を造らしめ、親自ら蘿蔔を以て刻図して指示し、其の小形は今水戸の文庫（彰考館）に蔵し、其の図は『朱氏談綺』に在りて見る可し。義公 常に先生、多才多能にして、無人の国を開き、衆くの男女を一に集め、先生一人 其の地に至りて、学問及び百工の師と為るに感ず。」寛政年間、この図を見た幕府は進覧するよう水戸藩に求め、昌平坂学問所の聖堂を設計する際の参考とした。

---

[68] 朱舜水「答野節問」、『朱舜水集』、388 頁。

[69] 『耆舊得聞』については、徳川真木監修·徐興慶主編『日本徳川博物館蔵品録—朱舜水文献釋解—』（上海：上海古籍出版社，2013 年），19-24 頁参照。

（四）朱舜水の「学校議」

学校の制度と教育は、国家の発展と密接不可分な関係にある。朱舜水は云う、「庠序学校は誠に天下国家の命脈たりて、一日も廃すべからざるなり。庠序の重んずるに足るに非ず。庠序立ちて庠序の教興る、斯れ重ずるに足るのみ。虞・夏・商・周より以て今に至るまで、未だ之れ改むること有らざるなり。是の故に興道致治の世は、君・相賢明たりて、其の学校の制は、必ず釐然として具挙し、煥乎として観るべし。是に於いて人材輩出し、民風淳茂たりて、運祚亦た以て霊長たり。衰世末俗の若きに至りては、経国の大猷を念ぜず、事事廃弛し、以て賢才鬱湮し、民風愉薄たりて、弱肉強食、姦宄沸騰するを致して、国運も亦た以て之に随ふ。明朝は百王の後を承け、礼制を修明し、膠庠を建興し、之を三代・両漢の隆に比(くら)ぶれば、則ち足らざるも、諸を因循苟簡の朝に較ぶれば、則ち又た大ひに相ひ逕庭するのみ。学校の設は、約略して之を計れば、凡そ六等有り[70]。」

如上の発言から窺い知れるのは、朱舜水が断えず学校を創立し、聖堂を建設することの重要性が強調していることであり、これらの提案は徳川光圀にも受け入れられた。光圀は毅然として大成殿（聖堂）を建設して、これを水戸藩の大学制度を推進するための出発点とすることを決定し、手をつくして藩内の守旧派の意見を排除していった。しかしながら、当時の水戸藩は数多くの文教事業の推進と進行中の史局事業（『大日本史』の編纂事業）が重なって財政面で危機に直面しており、実行困難のため、最終的には諦める他なかった。これは徳川光圀が水戸藩の政務を執っていた期間中に起こったことで、「畢生の挫折」ともいうべき出来事であった。

ただし『泰平年表』の記述によれば、朱舜水の死後八年目、即ち元禄三（1690）年七月に、第五代将軍徳川綱吉が新たに孔子廟を建てることを提案している。綱吉は忍岡が狭いことから、場所を湯島に移すように命じ、大名の松平輝貞（1665-1747）を総責任者とした。

[70] 朱舜水「学校議」、『朱舜水集』、461-463 頁。

翌年（1691）春正月、また儒臣の関係者に外神田台に聖堂（湯島聖堂）を建造させ、こうして孔聖廟が竣工した。綱吉自ら額に「大成殿」の三字を書き、聖廟に掲げさせ、平阪を改名して「昌平坂」とした。また『十三朝紀聞』の示すところによれば、1691 年二月、綱吉は林信篤（春常、鳳岡，1644-1732）にそれまで仏僧の風体を止めて髪を伸ばすように命じ、大学頭に任じた。忍岡にあった聖像を湯島の新廟に遷すと、新たに十哲神主を作らせ、狩野益信（1625-1694）に命じて「七十二賢及先儒圖」を描かせた。自ら『論語』を講義をし、その後もしばしば自ら講義を行い、諸侯や僧侶らに聴かせたという。

徳川光圀の学校建立という願いは、ついに実現した。聖堂は元禄十六（1703）年に大火に遭い焼失するものの、翌年 1704（宝永元）年に直ちに再建されている。「湯島聖堂」は「寛政異学の禁」の後、1797 年に「昌平坂学問所」と改名された。『文苑遺談』（巻一）は、約百年後の寛政年間に行われた昌平坂の孔子廟建造について、次のように云う、「幕府仍ほ持続して有司に命じて昌平坂の孔廟を建造させしむるも、其の制度を詳らかにする莫し。本藩（水戸）に大成殿の木様有るを聞きて、旨を伝へ観を求む。本藩其の木様を具して之を上（のぼ）せば、幕府乃ち其の制度に倣ひて、以て大成殿を造る。成るに及びて、幕府臨観し、制度の始めて備はるを嘉して、旨を本藩に伝へ賞諭す。文公乃ち使を遣はして、先生の廟に祭り告げたり[71]。」朱舜水はかって聖堂の儀式と「廟堂之制」を推進して教育を振興し、孔子の教えを普及させようとした。その重要性は、後に徳川幕府が注目するところとなったのである。

四、結論

朱舜水は水戸藩主徳川光圀や加賀藩主前田綱紀に対して、聖賢の君は必ず学校を先務とするという「概念」をもたらした。例を挙げれば、朱舜水は初めて江戸に来た時、徳川光圀に向かって、「僕は、

[71] 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』、255 頁。

上公の能く徳を尊び道を楽しむを以ての故に、自ら揣らず、遠きより渉りて此に至る。上公儻し能く制を更め俗を善くし、邦を経めて弘く化し、庠序の教を謹しみ、孝弟の義を申べれば、万古の光と為る。僕の師に聞く所の者を以てすれば、或ひは以て賛襄すること万なるべきに庶し」[72]と述べている。「答源光圀問」中においてまた云う、「聖廟とは、即ち学校なり。中を聖廟と為し、西を明倫堂と為し、北を尊経閣と為し、東北を啓聖宮と為し、或ひは西或ひは東を射圃と為し、較射を以て義と為すが故に「校」と曰ふなり。毎府毎県、必ず学を建て師を立つ[73]。」光圀は朱舜水の建議に従い、「大成殿」建立を計画した。

徳川光圀の側近である藤井徳昭は主君と朱舜水の二人の関係を回想して、「主君の賢、先生の徳を顧れば、同気相ひ求め、同明相ひ照らす。豈に天意の為す所にして、聖賢の道をして復た世に明らめしめんと欲する者なるか。非ならんや。殊に人智の能く及ぶ所、力の能く致す所に非ざるなり。主君は敬礼して[74]、以て賓師と為し、輿に乗りて数〻訪れ、献酬して歓を尽し、近臣は門に候ち、道に絡繹す」[75]と云う。ここに聖賢の道が徳川社会において復活したことの重要性を言い尽くされている。

安東省菴の言葉を用いて形容するならば、朱舜水は日本の儒学において、人々の知識を開き世の事業を成就させ、さらに国家を治めて広く徳化するという巨視的な視点から礼楽刑政を日本に広めた人物であった。また、微視的視点からいえば、制度や文物のつぶさなところまでも伝えた人物でもあった。朱舜水の学問方法は、「性」や「命」を高談せず、「孝」「弟」「忠」「信」を掲げて人々を導き励ますもので、人々の生活や日常、人倫から離れないものであった。また、舜水の学問は「誠」「敬」を主とし、言動に発現するものであり、

[72] 朱舜水「答源光圀問」、『朱舜水集』、347 頁。
[73] 同上、349 頁。
[74] 礼制の伝播問題については、徐興慶「朱舜水與徳川水戸藩的禮制實踐」(『臺大文史哲學報』第 57 期，2011 年 11 月）を参照。
[75] 徐興慶『新訂朱舜水集補遺』、243 頁。

随所に孔子の形象とその思想が充満していたのである。

朱舜水においては、「聖学」と学校（庠序）・学宮とは関連性のある概念である。彼は実践を主要な方法とすることで、孔子の学説と形象とを結合させて、異郷の地に文化を移植するという事業に取り組んだ。朱舜水は実践によって徳川社会、特に水戸藩に「聖学」を押し広める必要性があると考えていた。「聖学」の精神の実現と「誠」、「敬」、「仁」、「愛」、「忠」、「孝」の観念とを一組の実践法則とした場合、聖学という問題はただちに、孔子の形象という意味をも帯びてくる。結論から言えば、朱舜水の理想の中の大学制度は決して完成しなかった。この聖学という問題はどのようにすれば実現可能だっただろうか。舜水は精神領域と生活実践の両方面から問題を考えていた。この問題と、徳川社会における産・官・学の制度の確立、およびそれらを推進した動力との間には、密切な関係があるように思われる。

（訳：青山大介）

付記

本稿は台湾大学人文社会高等研究院主催の「東亜孔子形象之建構與変遷」国際シンポジウム（2013.7.5）にて発表し、加筆したものである。同研究院「東亜儒學：近代日本新學問的形成與傳統儒學思想的轉化」プロジェクト 2013 年度の研究成果の一部である。